



Taka Ishii

Gallery

1-3-2 5F Kiyosumi Koto-ku Tokyo #135-0024, Japan
tel 03 5646 6050
fax 03 3642 3067
web www.takaishiigallery.com
email tig@takaishiigallery.com

篠原有司男《ボクシング・ペインティング》2009年

1932年、東京に生まれた篠原有司男は69年に渡米、現在はブルックリンに在住する。60年代日本の反芸術英雄譚のヒーローの一人であり、《ボクシング・ペインティング》や《イミテーション・アート》を創始した後、ニューヨークではダウントウンの路上に豊富な廃物を使ったオートバイ彫刻やエネルギーあふれるドローイングや絵画を制作してきた。

「早く、美しく、リズムカルに」という篠原のモットーが、もっとも象徴的かつ具体的に体现されているのが《ボクシング・ペインティング》だろう。たとえば、1961年、アメリカ人写真家、ウィリアム・クラインが撮影した写真は、白い平面の広がりにもつとむかう篠原の野生的な美をとらえ、ボクシングの所作のスピードとリズムすらほうふつとさせる。

制作は、キャンバスではなく安く入手できるケント紙に墨汁で行われていた。コンクリートのブロック塀に紙を糊付けしたこともあったから、終わった後は雨ざらしで、そのうちボロボロになった、とも聞いている。純粋なアクションを求めた篠原の《ボクシング・ペインティング》は、作画を目的としたポロックやマチウ、また具体の白髪一雄のアクションとは一線を画していた、という作家の説明にもうなずけるものがある。

さらに、当時の篠原の作品は読売アンデパンダン展に出品された大作もふくめて、現存しないものも多い。作品が売れる、という意識はもとより、作品を保存する、という態度も積極的にはなかった時代である。《ボクシング・ペインティング》も例外ではない。

結果として、60年代当時の《ボクシング・ペインティング》は行為の記録写真だけが現在にまで残ることとなった。これが《ボクシング・ペインティング》の第1期である。

「そのボクシングペインティングは、大変重要なアートであることにぼくが気がついたのはズーっと後のことです」と、のちに篠原は当時を振り返って回顧している。

美術史的な意義も、60年代美術が歴史化されるようになって認められるようになった。中でも1991年国立国際美術館（大阪）で開催された『日常と芸術：反芸術/汎芸術』展は重要である。《ボクシング・ペインティング》が写真的事実としてではなく、モノとして提示されたからだ。60年代以来初の公開制作が行われ、白いキャンバスに黒の「作品」は会場に展示された。これ以後、コンスタントに公開制作が続いていく。その経緯は2005年神奈川県立近代美術館（鎌倉）で開催された回顧展カタログに詳しいが、支持体にはしばしばキャンバスが用いられ、色彩も導入され、「行為」と並んで「行為の結果」も「作品」として認知されていく。

それは単に美術館学的に作品を展示・保存する志向があっただけではなく、右から左へと動く作家のボクシングの行為が、画面の上に時間をつくり、それが絵巻構造のように横長の画面に流れて、「結果」が「絵」になっていたからではないか。私見になるが、2003年にニューヨークの伊勢文化財団ギャラリーでの公開制作を見た時の印象は、「作画が目的でないといっても、現実には絵になっている」というものだった。こうなると、第1期と様相は異なってくる。そこで、90年代以降の公開制作を《ボクシング・ペインティング》の第2期と考えてみたい。作品を過去の一時点に固定する狭義の「再制作」を超えて、現在を生きている作家が作品を「再生」させ、作品が新たな環境で新たに展開していったからである。

それがさらに展開して第3期が2009年に始まる。公開制作の「結果」のキャンバスではなく、キャンバスのみが《ボクシング・ペインティング》として提示されたのだ。同年、ニューヨークのイーサン・コーエン・ファインアーツでの個展であり、今回の出品作でもある。

これを、反芸術として出発した作品が絵画に回帰し、ひいては美術市場へ回収された、と考えるか、一作家の展開として積極的に評価するか、意見は分かれるかもしれない。

しかしながら、アクションの先例を考えるなら、ポロックはほんの10年足らずの間にドリップ絵画の多様性を濃密に示し、白髪一雄は一生をかけて足で描く絵画に他力本願の境地を見出した。篠原もようやくボクシング・ペインティングにおける「絵画」の可能性を探求しうる局面に達したのだ、と考えたい。ボクシングのスピードと偶然の要素、色彩やモノクロームの可能性、構造の多義性。《ボクシング・ペインティング》は、私たち、そして作家自身が知っていると思込んでいる以上に多彩な可能性を持っているのではないだろうか。

（富井玲子 2011年8月27日）